2022 年 2 月 11 日

公共財団法人　海外子女教育振興財団

AG5 事務局　様

2021 年度 AG5 実施報告書

子どもが豊かなコミュニケーション力で他者と関わり、
新たな世界を拓く「サンパウロ・プラン」の実践

サンパウロ日本人学校

子どもが豊かなコミュニケーション力で他者と関わり、新たな世界を拓く「サンパウロ・プラン」の実践
～リオ・デ・ジャネイロ日本人学校との遠隔授業交流を通して～

サンパウロ日本人学校　校長 曽川 和則

Ⅰ. はじめに

今の子どもたちが成人して社会で活躍するころには、社会はさらに厳しい時代を迎えていると予想されている。「絶え間ない技術革新」「ますます進むグローバル化」「after コロナの新たな社会様式」「Society5.0 時代」など、社会構造や雇用環境などは大きく変化し、子どもたちが就くことになる職業も、現在とは大きく様変わりしていくことだろう。

このような変化の激しい時代や社会を生き抜いていくためには、どのような資質・能力が求められるのだろうか。

令和３年１月の中央教育審議会答申による「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」では、「一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるよう、その資質・能力を育成することが求められている。」と述べられている。

また昨年度より施行されている現学習指導要領の要点の一つが、「主体的・対話的で、深い学びの実現」である。授業改善にあたっては、「知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見出して解決策を考えたり、思いや考えをもとに想像したりすることに向かう学習の過程を重視することが大切である。」と述べられている。

これらのことから、何かを知っている、あるいは何かをしたことがあるといった知識や経験そのものが重要なのではなく、それらを活用しながら主体的に解決しようとする態度と、その過程において他者と協働し、新しいものを創り出す力が、今求められていると言えるのである。

Ⅱ. 本校の実態と目指す子どもの姿

本校では 1967 年の開校以来、在外教育施設としての使命を果たすべく、日々の授業の中で子どもたち一人一人が大きく育つ姿、そしてブラジル・サンパウロの地で様々な人や自然・文化と触れ合いながら、世界に大きく羽ばたく姿を追い求めてきた。

特に昨年来のコロナ禍では、子どもが学校に登校することが叶わず、1 年以上にわたり各家庭を遠隔授業ツールでつないだオンライン学習を続けてきた。当初は子どもが他者とのつながりを感じることが難しく、孤独や不安を感じることが多い困難な状況もあったが、一人一人が自分自身としっかりと向き合い、日々の学習を継続してきた。さらにリオ・デ・ジャネイロ日本人学校と協働して学習を行ったり、オンライン上でゲストティーチャーを迎えて学びを深めたりと、新たな学びのあり方を求めて、子どもと教師が一体となって挑戦を続けてきた。

本校の子どもたちは、学習に対して前向きに取り組む子どもたちである。本年度実施した児童・生徒アンケートの調査結果では、「友達と一緒に勉強することは楽しいですか。」「授業のめあてに向かって、頑張ろうという気持ちをもって学習していますか。」などの項目は、肯定的に答えた児童・生徒が全体の 80 パーセントを超えている。また本校教職員を対象にしたアンケート調査でも、「自分から様々なことに挑戦しようとすることができる児童・生徒が多い。」「他の日本人学校や現

地の外国人の方々との交流にも、積極的に取り組んでいる。」などの回答が多く、意欲的に学習に取り組んだり、他者と関わろうとしたりする子どもの姿が多くの場面で見られている。

しかし、「授業で思ったことや考えたことを、文章や図でまとめることは得意ですか。」「授業で勉強したことを、さらに詳しく調べたり考えようとしたりしていますか。」という項目に肯定的に答えた児童は、全体の６０％程度にとどまっている。また、他の調査の分析においても、「学んだことをさらに自らの力で深めたり、広げたりすることに難しさを感じている児童・生徒が多い」という傾向が明らかになってきた。

このような結果から、「授業のめあてに向かって進んで取り組むことはできるものの、他者との協働を通してさらに学びを深めたり、広げたりする力を育んでいくべきである」という課題が浮かび上がってきた。

今我々は、本校の子どもたちが、他者との関わりを通して学びを深め、世界に羽ばたく力を育むための遠隔教育プログラムを「サンパウロ・プラン」と名付け、学校全体で共有しながら研究を進めている。

Ⅲ.「サンパウロ・プラン」作成にあたって

1.研究主題・副主題設定の理由

本校の子どもたちの「今」と「これから」の世の中を生き抜くために必要な力について、その両面から考察した結果、次のような目指すべき子ども像が浮き彫りになってきた。

「主体的に学ぶ姿」

・問いをもち、解決するために進んで考える。
・知識や技能、これまでの既習、経験を活用し、課題や問題に立ち向かう。
・間違いをおそれず、様々な方法を試して考える。

「他者と協働し、新たな世界を拓く姿」

・自分の考えを進んで発信する。
・友達の考えを進んで受け止め、分かろうとしながら聴く。
・友達との関わりを通して、よりよい考えを見つけ、自らを高めようとする。

このような子どもの姿を目指し、研究主題を

多様性を受け入れ、柔軟で豊かなコミュニケーション力をもち、協働できる子どもの育成（高度グローバル人材の育成）

と設定し、3年次研究に取り組んできた。

また、この主題を具現化するための「サンパウロ・プラン」で目指す授業像として、研究副主題

子どもが主体的に学び、他者との協働を通して新たな世界を拓く授業

を設定し、次の２つの視点から授業研究を積み重ねている。

視点１「子どもが主体的に学ぶことのできる教材化」
視点２「子どもが協働し、学びを深める学習展開」

2.研究の視点について

(1)視点1「子どもが主体的に学ぶことのできる教材化」

子どもが主体的に学ぶためには、学習を自分ごととして捉え、必要感や目的意識をもって問題解決に向かうことが大切である。コロナ渦のオンライン授業が続く中でも、学習の主体である子どもが自ら学びの価値を感じ、自分の成長を実感できる授業づくりを目指して、研究を進めてきた。

教材化に関わって、特に次の２点について大切にすべきと考えている。

①一人一人に対する理解を深め、子どもの実態を踏まえた教材化を図ること
②教材や題材をよく分析し、子どもに育みたい力を明確にすること

①にあたっては、各教科において、小学校 6 年間・中学校 3 年間で育むべき子どもの力を分析・整理することが大切である。

特にオンライン学習を行う中では、遠隔授業ツールの活用にあたって、より子どもの実態に即した教材化を行うことで、一人一人の主体的な学びにつなげることができる。

また②にあたっては、授業後の子どもの育ちの姿を想定することに、特に力を入れていく。まず教師が目指す子どもの姿（＝単元や題材の目標）をよく吟味し、それを子どもが実感できる手立てについても検討する。

単元あるいは 1 時間の中で、対面での指導と遠隔授業ツールを活用した指導を効果的に組み合わせていく。そうすることで、子ども自身が学びと成長の価値を実感できる、子どもが主体的に学ぶ教材化を図っていくことができると考える。

（2）視点2「子どもが協働し、学びを深める学習展開」

本時あるいは単元の学習で目指すのは、子ども一人一人が自分の考えを深め、自分の成長を実感する姿である。他者と積極的に関わる中で、自分の考えと他者の考えを照らし合わせ、比較・検討・吟味などの過程を通して新たな価値観を得、自分の世界を広げる姿を目指す。

学習展開に関わって、特に次の 2 点について大切にすべきと考えている。

①ねらいに迫るための教師の関わりをよく吟味すること
②子どもの必要感や発達段階に合わせて、他者との協働の場を柔軟に設定すること

①にあたっては、授業のねらいに迫るために、子どもの思考をつないだり、広げたり、共有したりするための発問や切り返し、新たな資料提示など、教師の関わりについて精査することが大切であると考える。

協働を通して考えを深める子どもを育てるために、多様な手立ての中から本当に必要な手立てを吟味し、子どもの思考に沿った授業展開を目指していく。

②にあたっては、子ども同士が関わり合うことは、一人一人が自分の考えを深めるためであり、学習の目的ではない。しかし、子ども同士の考えが違っていたり、理解のレベルに個人差が生まれたりしたときなどには、子どもの必要感に応じてペアやグループでの交流を意図的に設定する。

そのためにリオ・デ・ジャネイロ日本人学校をはじめとした他の日本人学校との交流や、外部からのゲストティーチャーを招く場を単元の中に位置付けるなど、子どもの思考の幅を広げるための遠隔授業交流についても積極的に行っていくことで、一人一人の自分の考えを深めることができると考える。

サンパウロ日本人学校　研究構造図

学校教育目標　　豊かな人間性、確かな学力、たくましい体をもち、国際社会で信頼と尊敬を得る人間の育成

研究主題

多様性を受け入れ、柔軟で豊かなコミュニケーション力をもち、協働できる子どもの育成（高度グローバル人材の育成）

研究副主題

子どもが主体的に学び、他者との協働を通して新たな世界を拓く授業

授業づくりの視点

視点１
子どもが主体的に学ぶための教材化

視点２
子どもが協働し学びを深める学習展開

研究の２つの柱

【AG5事業への参画】
リオとの合同授業をはじめとした遠隔授業ツールを活用した実践・研修の充実

【日常実践の充実】
お互いの子どもを見る目を共有し、全ての子どもを全ての職員で見取る学校に

今年度の重点

「主体的・対話的で深い学び」を実現する遠隔教育プログラム「サンパウロ・プラン」の構築

各教科の目標を達成した姿（＝新たな世界を拓いた姿）の具現化

Ⅳ. 研究の具体的な実践

Ⅰ．小学部低学年部会の実践

「ほかのまちに住む友だち」

小学部低学年部会では、総合的な学習の時間に「ほかのまちに住む友だち」の実践を行った。サンパウロ日本人学校（以下、サ日校）11 名とリオ・デ・ジャネイロ日本人学校（以下、リ日校）3 年生２名がお互いの街の特色を調べ、遠隔授業ツールを活用して交流し、理解を深める学習である。

（1）自分の住んでいる地域と他地域との比較を軸に据えた教材化

本単元では、両校の子どもたちが相手校の街の特色について、食べ物・スポーツ・観光といった視点に沿って調べる活動を、単元の中心に位置付けた。

国土の広いブラジルにおいて、地域ごとの特色には大きな違いがある。特に気候や地理的条件の違いは大きく、それらの影響が街並みや人々の生活、観光業などと密接に結びついている。

子どもたちもそれらの違いに気付き、自分たちの調べたいテーマを見つけ、探求し、意欲的まとめる活動を行っている姿が見られた。子どもたちがまとめたテーマは、主に下記のとおりである。

- 有名なサッカーチームや選手
- 海やビーチの美しさや魅力
- 人々に人気の食べ物や料理
- 気候や自然環境の特色
- キリスト像や国立公園などの主な観光名所

どれも子どもたちにとって身近な事柄で、これまでのブラジルでの生活経験が存分に引き出された、調べ・まとめる活動であった。

地域性を生かした教材化によって、生活経験を引き出しながら両者の特色を比較し、さらに追究を深めようとする、サ日校の３年生の子どもらしい姿を見ることができたのである。

（2）遠隔交流を通して相手意識を明確にした学習展開

単元の後半に、調べたことを遠隔授業ツールを活用して双方の子どもたちへ発表し合う活動を行った。一人一人が作成した新聞を、画面共有機能を通して両校の子どもたちが共有しながら発表を行った。

両校の子どもたちともに、調べたことを伝えたいという気持ちを強くもち、様々な表現で意欲的に発表している姿が見られた。また新聞に写真を掲載して分かりやすく工夫したり、クイズ形式の発表で相手の興味を引いたりするなど、相手校の子どものことをよくイメージしながら取り組んでいる様子も見られた。

授業中や授業後には、子どもたちから下記のような感想が挙げられた。

- 楽しいクイズを通して、相手の街のことを知ることができてよかった。
- 初めて見たことがたくさんあって、びっくりした。
- もっと相手の街のことを調べたり、いつか遊びに行ったりしてみたい。
- 今日のような交流をこれからも続けて、もっと仲良くなりたい。

上記のような子どもたちの反応からも、遠隔地を結んだ交流活動により、子どもたちの相手意識を高めたことで、より協働を通して学びを深める学習を行うことができたと言える。

また、今回の学習経験を生かし、児童に芽生えた意欲から、次単元ではブラジル国内のもう一つの日本人学校であるマナウス日本人学校とも、交流する機会をもつことができた。遠隔地との交流学習の日常化という意味でも、意義の大きい実践とすることができたのである。

(3) 単元の概要

○単元の目標

・サンパウロとリオ・デ・ジャネイロの文化・風習・気候などについて理解するとともに、書籍、インターネット、実際に話を聞くなどしながら、調べまとめることができる。
【知識及び技能】

・相手のことを知ること、相手が話しやすくなるように聞くこと、相手を意識して伝えること、などに気を付けながら、交流することができる。【知識及び技能】

・サンパウロとリオ・デ・ジャネイロを比較することで、ブラジルの地域による環境・文化・風習・気候などの違いに気付き、双方の土地の新たな魅力に気付くことができる。
【思考力、判断力、表現力等】

・異なる街に住む人とのよりよい交流方法を学ぶことで、相手への理解だけでなく、自分の住んでいる街への愛着をもつことができる。
【学びに向かう力、人間性等】

○単元の流れ（11時間扱い）

	子どもの主な学習活動
1	○ブラジルと日本にどのようなつながりや関わりがあるかについて考えよう。 ○単元の学習問題をつくろう。 ほかのまちに住む小学生と、なかよくなろう。
2 ～ 4	○リオ・デ・ジャネイロのまちを調べよう。 ・相手校のまちを次のような観点から調べる活動 ・場所や気候　・名所や観光施設 ・食べ物　・サッカーなどのスポーツ ・サンバ　・商業施設　など リオの友達がどんなまちに住んでいて、どんな生活をしているのか分かったよ。
5 ～ 8	○調べたことをまとめよう。 ・調べたテーマに沿って、新聞にまとめる活動 ・それぞれのテーマに沿った情報の収集・整理・分析 ・２校間での交流を意識したまとめ方の工夫 調べたことを工夫して新聞にまとめることができたよ。早くリオの友達に伝えたいな。
9 ～ 11	○発表会をしよう。 ・発表用原稿の作成・準備 ・両校での発表と交流 ・単元の学習の振り返り 自分が調べたことを上手に伝えたり、友達の発表をよく聞いたりすることができたよ。お互いのまちのことを、これからもたくさん調べてみたいな。 ・マナウス日本人学校との交流（次単元）

○単元の主な評価規準

・相手の話を聞いて、自分の感じたことを様々な方法で表現している。【知識・技能】

・発表会での交流を通して、相手への感謝の気持ちや自分の街の魅力を再発見している。
【思考・判断・表現】

・異なる街に住む友達とのよりよい交流方法を学ぶことで、相手への理解だけでなく、自分の住んでいる街への愛着をもとうとしている。
【主体的に学習に取り組む態度】

2．中学校部会の実践
「ブラジルと日本の架け橋になろう」

中学校部会では、総合的な学習の時間に「ブラジルと日本の架け橋になろう」の実践を行った。サ日校中学１年生４名と中学２年生９名、リ日校中学１年生１名が日本とブラジル両国のつながりについて調べ、遠隔授業ツールを活用して交流し、他の日本人学校への発信を目指した学習である。

（1）ブラジルと日本の比較を軸に据えた教材化

本単元ではまず保健体育科の「体育理論」の学習と関連付け、女子ラグビー元五輪代表選手の井上真理恵氏をゲストティーチャーとして招き、スポーツを通した国際交流のあり方や価値について理解を深めた。また７月～8 月に行われた東京オリンピックを視聴した観戦レポートをまとめ、井上氏に発表して講評をもらう活動を通して、自分の考えをさらに深めたり、新たな視点を得たりすることができた。

井上氏との授業後、子どもたちからは次のような感想が挙げられた。

- 事前にテーマを決めたことで、深く考えながら観戦することができた。
- 国籍や文化、各国の内情や日本との関わりについても考える機会になった。
- スポーツとしてだけではなく、一人一人の選手を「人」として見ることで、様々なことをより知りたくなった。

その後、「人」「食」「もの」という３つのテーマから一つを選択し、さらに両国のつながりを追究する活動を行った。その中では、違う価値観に目を向けることの大切さやお互いの文化を尊重し合うことの価値など、井上氏から学んだことが調べ・まとめる活動の中で存分に生かされていた。

一度スポーツという具体的な視点で理解を深め、さらに視野を広げてみたいという子どもの意欲を引き出すことで、「日本とブラジルの架け橋になろう」という目標に向かって主体的に追究する子どもの姿を、具現化することができたのである。

（2）協働を通して深めた学びを発信する場の設定

前述の３つのテーマについて一人一人が調べ・まとめる活動の中で、サ日・リ日両校を遠隔授業ツールでつなぎ、交流する場を設けた。

まとめたものを発表することはもちろん、調べ学習を進めている中でも日常的に両校をつなぐ機会を設けることで、調べている途中でも気付きを共有できたり、一緒に活動すること自体を身近なものにしたりすることができたことが、大きな成果であったと言える。

また、次の２つのまとめたことを発表する場を、単元の中に位置付けた。

①サ日校とリ日校間の交流
②サ日校・リ日校・サンホセ日本人学校・アグアスカリエンテス日本人学校、4 校間の交流

特に②では、コスタリカとメキシコという違う国の学校への発信の場を設けることで、他国の子どもの感想を受けて自分の考えを確かなものにしたり、新たな気付きを得たりすることをねらった。

２つの交流後、子どもたちからは次のような感想が挙げられた。

- 日本人の移民の苦労と努力の積み重ねが、ブラジルに根付いていることが分かった。
- 他国の日本人学校との交流を通して、地理的に遠い国でも身近に感じて交流できるオンライン学習の価値を実感した。

単元の中で意図的に遠隔授業ツールを活用した協働的な学習の場と、そこで得た学びを発信する場を位置付けたことにより、さらに子どもの学びを深めたり、広げたりすることができたのである。

(3) 単元の概要

○単元の目標

・ブラジルと日本に関わる人や両国のつながり、世界とのつながりについて、情報を集め、整理・分析し、まとめることができる。
【知識及び技能】

・サ日校とリ日校の２校合同で主体的・協働的に取り組み、互いの価値観や世界観を理解し合うことで、新たな考えをもつことができる。
【思考力、判断力、表現力等】

・ブラジルの地から日本や世界へ発信することで、自らがブラジルと日本の架け橋を担う意識を高め、両国のつながりについて相互理解し、自分の価値観を深めることができる。
【思考力、判断力、表現力等】

・探究的な学習や遠隔での学習を通して、互いの考えを尊重する態度や柔軟で豊かなコミュニケーションする方法を身に付けることができる。　【学びに向かう力、人間性等】

○単元の流れ（20 時間扱い）

	子どもの主な学習活動
1	○ブラジルと日本にどのようなつながりや関わりがあるかについて考えよう。 ○単元の学習問題をつくろう。 ブラジルと日本の架け橋になろう。
2 ～ 8	○オリンピックを通して、国際交流のあり方について学ぼう。 ・東京オリンピック観戦レポート作成 ・観戦の視点づくり ・元五輪選手井上さんの講話から学ぶ ・レポート交流会と井上さんへの発表 オリンピック調べを通して、国際交流や異文化理解に対する考えを深めることができた。
9 ～ 16	○ブラジルと日本に関わる人や両国のつながりについて調べよう。 ・「人」「食」「こと」を中心とした、自己テーマの設定 ・それぞれのテーマに沿った情報の収集・整理・分析 ・プレゼンテーションソフトを活用したまとめ・発表準備 ○サ日校・リ日校間の２校交流会での発表、討議を行おう。 ・遠隔授業ツールを活用した発表と交流 ２校間の交流を通して、日本とブラジルのつながりについて、より深く理解することができた。
17 ～ 20	○調べたことをアグアスカリエンテス日本人学校とサンホセ日本人学校にも伝えよう。 ・発表用プレゼンテーションの作成 ・両校への発表と交流 ブラジルと日本のつながりを学び、発信することで、今までよりも広い視野をもったり、国際的なつながりを深めたりすることができた。

○単元の主な評価規準

・個人テーマに沿って、発信したい内容を分かりやすくまとめ、伝えることができている。
【知識・技能】

・ブラジルと日本のつながりについて考え、ICT を活用してレポートやプレゼンテーションの形で他の日本人学校に発信することができている。
【思考・判断・表現】

・異文化理解や国際交流等、単元の中で自分が学んできたことを整理し、今後の人生に生かそうとしている。　【主体的に学習に取り組む態度】

3．小学部高学年部会の実践
「ブラジルを好きになる、もっと好きになる～ブラジルのよさをみんなに伝えよう～」

小学部高学年部会では、総合的な学習の時間に「ブラジルを好きになる、もっと好きになる～ブラジルのよさをみんなに伝えよう～」の実践を行った。サ日校小学５年生 10 名とリ日校小学４年生１名、5 年生４名がブラジル文化について調べ、交流し、理解を深める学習である。

（1）「サンバ」という身近な題材に焦点化した教材化

本単元では、ブラジル文化の中から「サンバ」を取り上げ、その魅力を追究する活動を単元の中心に位置付けた。サンバとは言うまでもなく世界的に有名で、子どもたちにとって最も身近なブラジル文化の一つである。また、踊り・音楽・衣装・携わる人々など、様々な視点から子どもたちが追究を進めることが可能な題材でもある。

一人一人の興味・関心を最大限生かすことにより、協働的な学習の場で、多角的な追究を行うことができる。その追究を最終的に一人一人のより深い学びにつなげるための手立ての一つとして、サンバに焦点化した単元構成を図ったのである。

単元の中では、「踊り」「衣装」「楽器」という３つの視点から追究する小グループを構成し、グループでの調べ学習を単元の中心に位置付けた。４～６名程度の少人数できめ細やかな指導を行うことで、一人一人がそれぞれの見方・考え方を働かせながら追究を進めている姿が見られた。

またゲストティーチャーとしてサンバ講師の葛西叙江氏を招き、サンバのステップや振り付け、あるいはサンバの歴史的・文化的な価値などについて理解を深める時間を設けた。

葛西氏の授業後、子どもたちからは次のような感想が挙げられた。

- ・葛西先生の姿がとてもかっこよくて、同じように踊ってみたいと思った。
- ・ステップは難しかったけど、足や手を一生懸命動かすことができた。
- ・男性の踊りもあると知って興味がわいた。

このように、「サンバ」という題材を軸に単元の学習を展開し、少人数グループの構成やゲストティーチャーの授業などを効果的に位置付けることにより、子どもの興味・関心を最大限に生かし、多角的な追究を行うことができたのである。

（2）日常的な遠隔交流授業の積み重ね

本単元の学習を行う前から、両校の子どもたちは日常的に遠隔授業ツールを活用した交流授業を行ってきた。特に今回はサ日校の５年生とリ日校の３・４年生という異学年の交流となったが、PC 越しに楽しそうに交流を行う姿が見られた。

また両校の使用機器やネット環境の整備も同時に進め、情報交換を積極的に行うなど、環境面でも改善が見られたことも大きな成果の一つである。

本単元の中でグループごとに調べたことを発表し、交流する場を設けた。交流中は、自ら司会を務めて話し合いを進めたり、友達の考えを受けて自分の思いを伝えたりするなど、豊かに協働する子どもたちの姿が見られた。

グループでの活動を全て終えた後、子どもたちからは次のような感想が挙げられた。

- ・サ日校とリ日校が力を合わせ発表できた。
- ・映像や音を交えたり、実物を見せたりと、どのグループの発表も分かりやすかった。
- ・他の教科でも交流でき仲良くなることができた。これからも交流を続けていきたい。

日常的な遠隔授業交流の積み重ねから生まれた子どもたちの安心感が、授業を進めるうえでの大きな土台となる。その上で、子どもが授業の目標に向かって生き生きと交流を行うことができたことが、大きな成果であった。

(3) 単元の概要

○単元の目標

・ブラジル文化に触れ、体験することで、ブラジル文化と日本文化の違いに気付き、ブラジルのよさを伝えることができる。

【知識及び技能】

・ブラジルの文化（人、もの、こと）の中から課題を見出し、目的に応じた情報を収集・比較し解決策を見出す活動を通して、相手や目的に応じて表現したり、構成を考えて発信したりすることができる。

【思考力、判断力、表現力等】

・進んでブラジル文化に関わり、ICT を有効に活用して交流したり発信したりすることで、他者と協働して物事を成し遂げようとすることができる。　【学びに向かう力、人間性等】

○単元の流れ（20 時間扱い）

	子どもの主な学習活動
1	○サンバについて知ろう。 ・校内のブラジル出身の先生からサンバについての説明を聞いたり、音楽に触れてみたりする。 ○単元の学習問題をつくろう。 ブラジルをもっと好きになるために、サンバを学び、伝えるにはどのようにしたらよいだろう。
2 ～ 10	○サンバについて調べよう。 ・「踊り」「衣装」「楽器」の３つのグループに分かれ、疑問に思ったことを調べる。 ・ゲストティーチャーから踊りや歴史的・文化的価値について学ぶ。 サンバについて調べ、たくさんの人に愛されている秘密が分かったよ。他のグループにも、調べたことを伝えたいな。
11 ～ 15	○調べたことを伝えよう。 ・3 グループそれぞれが調べたことを発表する中間発表会を行う。 ・中間発表会を振り返り、気付いたことをグループごとに伝え合い、内容を改善する。 ・2 校間での最終発表会を行う。 ・講師にも発表会を見学してもらい、講評をもらう。 発表会で、調べたことを上手に伝えることができたよ。もっといろいろな人にも伝えてみたいな。
16 ～ 20	○学んだことをまとめ、伝えよう。 ・サンバについて学んだことをまとめる。 ・まとめたことを、参観日や行事などの場で様々な人に伝える。 サンバなどのブラジル文化を様々な視点から考えることができ、自分の考えを述べたり、議論したりしながら、ブラジルのよさをみんなに伝えることができたね。

○単元の主な評価規準

・ブラジル文化と日本文化の違いに気付き、そのことを伝えることができている。【知識・技能】

・ブラジル文化の中から課題を見つけ、情報を収集・比較・解決し、表現したり、発信したりすることができている。　【思考・判断・表現】

・進んでブラジル文化に関わり、ICT を活用・発信して交流したり、他者と協力して助け合ったりしようとしている。

【主体的に学習に取り組む態度】

Ⅴ.研究の分析・考察

1.視点1「子どもが主体的に学ぶための教材化」について

前述の 3 つの実践や日常の各学級での実践を通して、研究の視点 1「子どもが主体的に学ぶための教材化」に関わって、子どもの姿の変容から次の 2 つの成果が明らかになってきた。

- 子どもたちがブラジルの文化について理解を深めることができたこと
- 子どもたちが ICT の活用について、ハード・ソフト両面から理解や技能を深めることができたこと

一つ目のブラジル文化への理解について、3 年生の実践では、相手の小学生の住んでいる街の様子を調べる活動を通して、現地の生活や文化について新しい発見をする子どもたちの姿が見られた。

また、5 年生の実践では、サンバについて調べる活動を通して、歴史や文化・観光など、日本との比較も含めた様々な視点から考える様子が見られた。

どちらの実践でも子どもたちが自身の生活経験を生かしながら、その土地の地理的・歴史的環境についてさらに学びを深めることができたという点において、きわめて価値のある学習となった。

二つ目の ICT の活用の充実について、特に中学校部会の実践では、自分で文書作成ソフトを使用して資料を作成したり、プレゼンテーションソフトや遠隔授業ツールを効果的に活用して自分の考えを他者に伝えたりしている姿が見られた。

これらの ICT の活用能力は他の教科も合わせた日常授業の中でしっかりと育まれている。子どもが学びの価値を実感できたり、自身の考えを世界中に発信することができたりする ICT 機器が、子どもにとって身近な学習ツールの一つとして大変便利なものとなっていることを確認することができた。

一方で、指導する教師の関わりから、次の二つの課題も明らかになった。

- 目指す子どもの姿と目標をよく吟味すること
- ICT を使う目的を精査し、子どもの問題意識や思考に沿った活用のあり方をより深く探っていくこと

3 年生の実践では、子どもが相手の街について調べる学習を行った。それぞれが意欲的に取り組む姿が見られたものの、3 年生という発達段階を踏まえると、まず自分の街について調べ・発表するという活動を行った後に、相手の街を調べるという単元の構成も考えられる。自分の生活経験をもとに追究を進めていく発達段階や、社会科で自分の地域について学習する年間カリキュラムを踏まえると、そのような方法も考えられると振り返っている。

また、ICT の活用については、ICT を活用すること自体が目的になることのないよう、課題解決にあたって子どもの問題意識に応じた手立ての吟味を図るべきであることが明らかになった。

具体的には、次のような手立てである。

「子どもが問いをもつための ICT の活用」
- 教師の ICT を活用した事例や資料提示
- 題材となる事象の調査活動

「情報を収集するための ICT の活用」
- ウェブサイトを利用した資料検索
- ゲストティーチャーの招聘

「得た情報を整理しまとめるための ICT の活用」
- プレゼンテーションや文書作成ソフトの活用
- 資料保存のためのクラウド環境の活用

「遠隔地の他者に発信するための ICT の活用」
- 遠隔授業ツールを活用した発表会や交流会の設定

このように、子どもが思考する過程を教師がよ

く想定し、子どもの学びの目的や必要感に応じた手立てを単元の中に位置付けていくことの重要性が明らかになった。

2. 視点2「子どもが協働し学びを深める学習展開」について

研究の視点２「子どもが協働し学びを深める学習展開」に関わって、指導する教師のかかわりから明らかになった成果と課題は次の通りである。

- 日常的な交流を行うことができ、交流を行う目的や方法を多様化させることができたこと
- ブラジルという地域性を生かした交流ができたこと

特に国土が広く、地域によって地理的・歴史的・文化的条件が大きく異なるブラジルという国の中で、遠隔地をつないで行う学習の意味合いは大きい。各実践の具体例でも触れてきたが、サンパウロとリオ・デ・ジャネイロという環境が全く異なる街の相手と交流することによって、自分の考えを伝えたいという気持ちの高まりや、相手の発言を受けて新たな発見をする子どもたちの姿がたくさん見られた。

また、一人一台のタブレット端末やキーボードを各教室に配置したり、ソフトウェアの利用方法を子どもたちが学んだりすることで、遠隔地との交流を日常的に行うこともできた。５年生や中学部の実践では、子どもたちが遠隔授業の中で小グループを作り、自分たちで話し合いを進めている姿が見られた。年度当初から計画的かつ継続的に交流を進めることで、相手校の子どもたちに対する理解を深めることができたことも、大きな成果の一つである。

一方で、次の課題も明らかになってきた。

- 学びを深めるための協働的な学習の場のあり方について、検討を深めること
- ICT 環境の整備を今後も継続的に進めていくこと

学びを深めるための協働のあり方については、協働的に学ぶこと自体が目的ではなく、その結果一人一人の学びが深まったかどうかが重要である。教師の評価、あるいは子ども自身の自己評価といった手立てについて、より吟味を続けていく必要がある。

ICT 環境の整備については、例えばインターネットがつながりにくかったり、情報機器の配置が不十分なために想定どおりの授業を行うことができなかったりする場面が多く見られた。必要な機材があってもすぐに入手することが難しい環境ではあるものの、今後より遠隔交流授業を充実させていくことを見据え、ハード面・ソフト面ともに環境を整えていくことの必要性が浮き彫りになった。

3. 目指す授業像についての考察

本校では日常の授業全てが研究という理念をもち、「子どもが主体的に学び、他者との協働を通して新たな世界を拓く授業」を目指す授業像として設定し、研究を進めてきた。

前述の２つの視点に対する成果と課題を踏まえ、下記の発見があった。

- 授業の目標やねらいをよく吟味し、子どもの実態に即した活動内容の精査に努めること
- ICT 活用という観点からも、発達段階に合わせた学習カリキュラムを学校として構築すること。特に在外教育施設という特性上、遠隔教育プログラムの充実は、様々な可能性を秘めている。

低学年の子どもの意欲のもち方は、授業に対する安心感や見通しのある場の構成が重要であり、

「できる、わかる、もっとやりたい」という気持ちを引き出す授業づくりが大切になる。ICT 機器の使い方を丁寧に教えたり、遠隔交流上でコミュニケーションをとる活動を通して、楽しく交流できるための方法について学びながら、交流活動を継続的に積み重ねていくことが必要である。

高学年の子どもの意欲のもち方は、未知への探究である。知らないこと、できそうでできないこと、分かっていたつもりで分からなくなったことなどの気付きがあると、より意欲を高めることができる。遠隔地の文化や歴史的事象に触れ、生活経験や既習と比較できる題材を多く設定することで、高学年らしい追究のあり方を図ることができる。

さらに中学生となると、自分なりの仮説をもつようになる。その仮説と現実とのずれが生じたとき、「なぜ、どうして」と追究を始める。その追究の成果を他地域に住んでいる他者と交流することで、自分で解決したことがさらに深まったり、新しい視野で追究できたりする可能性が広がっていく。

このように子どもの発達段階を踏まえたカリキュラム・マネジメントを一人一人の教師が心がけ、その積み重ねを教師間で共有することで、学校全体で目指す授業像に迫ることができる。

そのためにも教師が常に新しい発想をもつこと、また在外教育施設ならではの資源を活用しながら子どもの可能性を拓こうとする日々の営みを継続することが、ますます必要になってくるのである。

Ⅵ. 研究のまとめ

1. 研究主題についての考察

これまでに述べてきた通り、**「多様性を受け入れ、柔軟で豊かなコミュニケーション力をもち、協働できる子どもの育成（高度グローバル人材の育成）」**という研究主題（目指す子ども像）の具現化を目指し、本校の教職員が一丸となって 3 年次研究に取り組んできた。

今年度 11 月に行ったアンケート調査では、「授業中は先生や友達の考えを知りたいと思いながら、話を聞いていますか。」「授業で勉強したことを、さらに詳しく調べたり考えたりしようとしていますか。」という項目に肯定的に答えた児童の割合が、4 月に比べともに 10%以上上回るという結果となった。また、同じく 11 月の調査で「遠隔授業ツールを使って遠くに住んでいる人と交流することが楽しい。」と回答した児童・生徒が 9 割以上にのぼるという結果も見られている。着実に学校研究で目指してきた姿が、子どもたちの姿の変容として結果に結びついていることが明らかになった。

教職員へのアンケート調査でも、子どもが ICT 機器を活用した交流学習に満足感を得られている項目に肯定的な回答が多いという結果が見られたり、遠隔地の学校との交流学習の機会を増やすことに前向きな声がたくさん上げられたりするようになった。研究主題で目指す子ども像が確実に具現化されてきていることを、教職員の中でも共有できている。

一方で、1 時間の授業の中で子ども一人一人の学びが深まったのかどうかについて、より精度を高めていく必要性が、どの部会の実践後にも課題として挙げられた。具体的には子どもたちの評価の観点をより精査することや、評価を行うための手立てについてさらに検討を深める必要があるといったことである。

そのためには、まず各教科の目標をよく吟味した上で、単元あるいは本時の中で目指す子どもの姿を明確にし、学校全体で共有することが大切である。我々教師が子どもの評価をするにあたっては、育てようとする子どもの力や姿を明確にすることが、教師自身の子どもへの関わりのあり方を省みることにもつながっていく。

つまり、日々の一時間一時間の授業の中で子どもを的確に見取り、各教科の目標を踏まえた児童・生徒理解に立った手立てのあり方を、より明確にしていく必要がある。

2.「サンパウロ・プラン」の継続・深化に向けて

この 3 か年研究で得られた成果と課題をもとに、本校では次年度以降も「サンパウロ・プラン」の継続・深化を図っていく。そのために大切にしたい観点は、次の 3 点である。

- 子どもの発達段階に合わせた理解をより深め、我々教師の子どもを見る目を養うこと
- ICT を活用した学習の中で、機器操作や遠隔交流上でのコミュニケーション能力等、子どもに育みたい力を整理・分析すること
- 地域や他校とのさらなる関係を構築し、在外教育施設ならではの開かれた環境下で、子どもの育成を進めること

子どもの学びや成長は、子どもと子どもを取り巻く環境との相互作用によって促進されていく。この豊かな歴史や文化をもつブラジル・サンパウロという土地の環境を最大限に生かすための、遠隔授業ツールをはじめとした ICT 機器の活用は、極めて大切な手立てのあり方の一つである。

そして、その ICT 機器を授業の中で活用するためには、目の前の子どもたち一人一人を的確に捉え、理解した上での教師の関わりが必要である。具体的には、それぞれの時期の子どもの特徴を捉え、その上で必要な教師の手立てを意図的に計画し、授業の中で関わっていくことであると言える。

例えば授業で行った子どもの活動をそれぞれの深い学びと自信につなげるためには、低・中学年の子どもの場合、「自分でやったんだ」「やりきれたんだ」という気持ちが必要である。また高学年や中学生の子どもには「自分で計画した、実行した」という意識と、そのようにできた原因を見つめ直す態度が欠かすことができないであろう。

そしてこのような満足感や充実感は、協働的な学びの中で、教師や友達の適切な関わりや励ましが大きな影響を与えることは言うまでもない。

在外教育施設特有の児童・生徒・教員の入れ替わりが多い学校事情の中ではあるが、本校で学び、本校から巣立っていく子どもたちの姿のイメージの共有化が必要になるとともに、そのためにそれぞれの学年で、何をどのように育てていくかを共通化する必要がある。

特に ICT が関わる分野についてはまだ検討が十分でない部分が多いため、本校の共通の土台となる目指すべき子どもの姿、あるいはその学年で確実に身につけさせたい知識・技能等について検討を深め、全教職員が意識して子どもに関われるようにしていきたい。

今年度の実践を通して浮き彫りとなった課題が、今後の学校研究の指針であると受け止め、子ども像への具現化や共有化、そして日常授業の改善へと生かされていくことが必要となる。目の前の子どもたちに対して行われている日々の教育活動の営みが、子どもの将来にわたっての「豊かに生きる力」を育むことであり、子どもの未来を築くことにつながることを肝に銘じたい。

Ⅶ. おわりに

「グローバル人材は、自分と違っている人とどう協力をしていくか、共感することができるかと発想し、違っていることを前提に、そこから共通のものは何かを探ろうとします。分かり合えるところ、協力し合えるところを見つけていく能力をもった人材といえるでしょう。」

この言葉は、村上和雄氏の著書「明日への叡智」（新学社）に書かれている一説である。このグロ

ーバル化が進む社会にあって、違っていることを前提に他者と共に活動し、新たなものを生み出していくことが、これからますます求められていくことであろう。

　そのような意味でも、学校を一つの社会として捉え、学校だからできること、学校でなければできないことを、子どもたちに経験させることが大切になってくる。
　その理念をしっかりと踏まえ、「ブラジル・サンパウロの地だからこそできること」「ＩＣＴを活用した遠隔地との交流だからこそできること」を追求しながら、「子ども一人ひとりをしっかり見つめ、常に全力で向き合える教師だからこそできること」をこれからも大切にして、さらに「サンパウロ・プラン」の継続と深化を進めていきたい。